



第 11 回

「^か^{えん} 火焰土器」

粘土 高さ29.5cm 縄文時代中期
馬高遺跡出土(新潟県) 馬高縄文館蔵(新潟県)

メイド・イン・ジャパンの原点

初めて火焰型土器を見た時、「これは、宇宙人が作ったモノに違いない!」と思いました。そのぐらいの衝撃……。

今から5000年も前に作られたという事実!そして、下から上に向かってどんどん大きくなってゆく、その不安定すぎるシルエット! 脳みそみたい、全面に彫り込まれた溝! 鶏のトサカに似ていることから「鶏頭冠^{けいとうかん}」と呼ばれる先端の形状! どこを見ても、いわゆる“和風”とは程遠い、日本人離れしたデザイン! もはや「こんなモノを“人間”が作れるわけがない」と思い至ったのです。

1万年以上続いた縄文時代。その中期の数百年間、信濃川流域で作られた火焰型土器。正直、煮炊きをする器としては使いづらかったことは間違いないのに、実際に煮炊きをした形跡が残っている。どうしてあんな形なのか?ますます分からない……。

ところが数年後、長岡の馬高縄文

館で「火焰土器」^(※)を見学した後、実際に粘土で火焰型土器の制作を体験した時、気づいたんです。「これぞ、元祖メイド・イン・ジャパンではないか!」と。

実際に作ってみると、それはそれは難しく、気が遠くなるような制作工程が続くんですが、無心になって粘土ひもを一本一本貼り付けていくうちに、感じたことのない体験をしました。独創的すぎて、あたかも一人の天才アーティストが作ったかのように見える火焰型土器。でもその模様一つ一つに意味があって、その“様式”を厳格に守って作られていることが分かってくるのです。表面の凸と凹が対になっていて、四方全ての線が繋がり、やがて天に向かって上昇して行くエネルギーの流れ。“火焰型土器を作る”という行為は、“数億年の生命の歴史を辿る”ことに繋がる一体感がありました。

何とか完成した後、もう一度見に

いった本物の「火焰土器」は、数時間前に見たモノとはまるで別の姿をしていました。まるで生きとし生けるもの、全てに対する生命賛歌のような、5000年前のモノとは思えない、生き生きとした「火焰土器」。正に名人が作った作品の輝きがありました。この“ものづくりに対する真摯な姿勢”こそが、日本人のものづくりの原点なんだと思います。

今、3Dプリンターで作った「火焰土器」の超精巧レプリカを、さわって見ることができます。長岡に行かれた際には是非、実物を見てください!

※火焰土器

1936年に馬高遺跡で出土した土器に付けられた名称。その後、火焰土器に似た形状の土器が発見されるようになり、総称して「火焰型土器」とよばれるようになった。最初に出土したのは「火焰土器」とよび、他と区別される。光村図書『美術I』P42-43では、笹山遺跡で出土した火焰型土器を紹介している。

片桐 仁
かたぎり・じん

芸人、俳優、彫刻家。1973年 埼玉県生まれ。多摩美術大学在学中に小林賢太郎とコントユニット「ラーメンズ」を結成。エレキコミックとのユニット「エレ片」としても活動している。舞台・ドラマ・映画・ラジオ等で幅広く活躍する傍ら、粘土による造形作品を制作。2017年4月からは全国6か所のイオンモールにて個展「ギリ展」を開催する。NHK Eテレ『シャキーン!』にレギュラーで出演中。